

【猫の帰命路】

自作です。お読みいただきありがとうございました。

いつか訪れる人の死というものを短編のテーマに据えることが多いのですが、目の前にすやすやと寝ている猫たちのその先を、どうしても考えずにはいられませんでした。

（死を考えることはもはや悲しみや寂しさを幾つか超えた上でのルーティンまたはライフワークみたいなもので、精神状態は至って普通）

モデルはうちの猫たち、女の子のウルと、男の子のナッツです。背中はおオレンジ、お腹は真っ白、いつも真顔でゆったりとして、時々クレイジーな走りを見せつける、何を考えているかわからない、近くて遠い存在。

動物を一人称にすると書ける情報にかなり制限がかかるため、視点を三人称にしました。ただし目線を猫に近づけるため、限りなく一人称に近い印象にすることを心がけたのでした。

今回のテーマは「存在しない名詞」をタイトルに入れること。新たな世界を生み出すきっかけとなる、良い課題！ これを守りつつ、一度描いてみたかった猫の生態。そしていつも通り生死について絡めるならば、とふと仏教にある用語「帰命」を使った造語「帰命路」はどうか、と思い至りました。存在しない名詞と言えるかどうかはギリギリでしたが……。

きよつきよつきよ、というのはキツツキの声。ちょうど短編を書き始める数時間前、うちの庭にやってきたコゲラ（キツツキの小さな種）がコツコツと枯れ木を打つ様子を、猫たちと私で眺めていたことから導入としました。そこから何となく一時間ほど手を動かしていたら生まれた短編です。いつも現実しか書けない私が「非現実」を書く良い機会となりました。

ミーリヤという名は過去の自作短編の主人公から。シュナは宮崎駿氏の著書から。

猫たちがここまで人間に近い思考を持っているとは思いませんが、甘えたり、恋しがったり、文句を言ったり、通じ合えたな、と思える瞬間があったり。つい人間に類推したくなるほどに、愛しい存在です。

目の前にいる猫たちが今後も平和に、ときにはハッスルして楽しく、この生を全うできることを願って。